「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 88

2023.6.17 発行

編集責任者：河地　清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第 88 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

ﾃｰﾏ:　『ふるさと春日井の自然と「蝶」について』

ー春日井市の蝶の変遷とギフチョウー

講師：尾崎　尚志　氏

春日井市自然環境保全活動推進員

モニタリング 1000 里地調査（蝶）築水の森調査員

かすがい東部丘陵自然観察会会員

講演する尾崎尚志氏

会場風景

『ふるさと春日井の自然と「蝶」について』をテーマに設定いたしました。

「「岐阜蝶」は、本州の里山に生息するチョウで、成虫は春に発生する。近年、里山の放棄、開発などにより個体数の減少が著しい。」（ウイギペディアより引用）　と言われて、絶滅危惧に瀕している「岐阜蝶」の生息実態を長年研究し、その保護の活動を続けておられる尾崎尚志氏に、春日井の自然と「岐阜蝶」生息意義について講演をしていただきます。

ギフチョウ

石黒直樹市長の挨拶

《講演要旨》（講演要旨は、尾崎尚志氏の寄稿を編集したものです。）

（1） チョウ類について

＜チョウ類の分類＞　チョウ（蝶）は、節足動物門、昆虫綱、鱗翅目に属するアゲハチョウ上科、セセリチョウ上科、シャクガモドキ上科のことだ。世界には、約 2 万種類いると言われているが、日本で確認されているのは、約 280 種類だ。その内、愛知県内に生息しているのは約 130 種類、春日井市内にいると思われるのは 78 種類だ。

＜蝶の語彙概念＞　日本語では、蝶はセセリチョウ上科とアゲハチョウ上科を指す言葉だが、英語では、セセリチョウ上科はスキッパー（skipper）、アゲハチョウ上科はバタフライ（butterfly）として区別、蛾はモース（moth）とする。しかし、ヨーロッパでは、蝶と蛾をとくに区別しないことが多い。フランス語のパピヨン（papillon）、ドイツ語のシュメッターリング（Schmetterlinge）またはファルター（falter）、イタリア語のファルファッラ（fanfala）、スペイン語のマリポッサ（mariposa）、ルーマニア語のフルトゥレ（fluture）等は、蝶と蛾を含めた、鱗翅目全体を指す言葉だ。

＜環境指標としての蝶＞　チョウ類は多くの種が幼虫期の時には、特定の植物を食草としている

が、成虫期には、花を訪れて花粉を媒介するなど、生活サイクルを通じて植物と密接な関係を持っている。この特徴のため、一定地域の植生状態を評価するのによい指標とされてきた。

(2) 春日井市の自然環境

＜多様な自然環境＞ 春日井市は多様な地形の中で東部丘陵の古生層山地にはシイ、カシ等の自然林やスギ、ヒノキ等の人工林が見られ、築水池をはじめ大小のため池もあって、豊かな里山里地が残されてきた。そこに、東海地区特有の自然環境に依存した多様な動植物が生息していて、大部分が愛知高原国定公園に指定され、保護されている。また、潮見坂平和公園やいくつかの社寺等に林地が残り、落合公園や朝宮公園といった大規模なものから中小の都市公園に一定の緑地がある。庄内川流域には広い河川敷が形成され、柳等の木々が生え、草地や畑地などが残されている場所もある。こういう市域の中で、市街地・草原性の蝶、丘陵地の蝶、一部山地の蝶も生息していて、種数も結構多かった。

＜自然環境破壊＞ 西側の新第三紀丘陵は、1960 年代半ば以降の高蔵寺ニュータウン等の宅地造成と住宅建設、高度経済成長期以降の工業団地などによる開発が進み、ゴルフ場造成などもあって、自然環境が大きく変貌してきた。また、東側の河岸段丘上や沖積平野の部分も宅地化や工業団地の形成等により、自然環境が大きく変わりつつある。この中で、減少してきている蝶も多く、一部絶滅したり、めったに見られない蝶も増えてきた。

(3) 春日井市の蝶の変遷

＜市内の蝶の推移＞ 市内で今までに確認された蝶は､90 種類あるが､春日井市内にはいないものの、偶然に飛来し、過去に市内で確認例がある蝶がメスアカムラサキの 1 種ある。かつては春日井市内にいたものの、近年絶滅したと思われる蝶が 6 種、また、近年情報が途絶えている蝶が 5 種あるので、それらを除くと、78 種（アゲハチョウ科 12 種、シロチョウ科 6 種、シジミチョウ科 20 種、タテハチョウ科 30 種、セセリチョウ科 10 種）が現在春日井市内で見られる蝶となる。

＜絶滅種と絶滅危惧種＞ かつては春日井市内にいたものの、近年絶滅したと思われる蝶が、ヤマトスジグロシロチョウ、ヒメヒカゲ、ウラキンシジミ、ミヤマチャバネセセリ、ギンイチモンジセセリ、コキマダラセセリの 6 種、また、近年情報が途絶えている蝶が、スジボソヤマキチョウ、ウラナミジャノメ、ウラギンスジヒョウモン、クモガタヒョウモン、オオミスジの 5 種ある。その他にも、絶滅危惧種が含まれ、なかなか見ることが出来ない蝶も増えてきた。

＜外来種の侵入＞人為的な持ち込みや外来植物への付着などにより、外来種が市内で発見されたものとして、2006 年以降のホソオチョウ、2013 年以降のムシャクロツバメシジミ、2021 年以降のアカボシゴマダラの 3 種がある。

＜南方系の蝶の北上＞ 地球温暖化等の影響もあり、南方系の蝶が北上し、1980年代以降に市内でも見られるようになったものは、クロコノマチョウ、ツマグロヒョウモン、ムラサキツバメ、ナガサキアゲハ、クロマダラソテツシジミの5種が上げられる。

(4) ギフチョウ

＜ギフチョウとは？＞　日本固有種で、平地～山地の落葉広葉樹林等で見られるアゲハチョウの仲間で、翅の表側も裏側も、黄白色地に黒い縞模様が目立つ。後翅亜外縁や肛角部近くに赤色や青色の斑紋があり、尾状突起があり、森林の低い位置ではややゆるやかに飛ぶが、高い所では早く飛び、幼虫は、カンアオイ類、ウスバサイシン等（ウマノスズクサ科）を食べる。江戸時代中期の 1731 年の作とされる『東莠南畝讖』にはギフチョウ図が掲載されているが、当時は「錦蝶」と呼ばれていた。現在の和名は、名和靖氏が、1883 年（明治 16）に、岐阜県郡上郡祖師野村（現在の下呂市金山町）で、新種のチョウを発見し、その地名をとってギフチョウ（岐阜。蝶）と命名したものだ。

＜ギフチョウの生態＞　早春に年１回だけ成虫が出現する「スプリング・エフェメラル（春のはかない命）」蝶の一つだ。春日井市内では、4 月頃に羽化するが、オスはメスより 1 週間くらい早いのが特徴だ。交尾はメスの羽化直後に行われることが多く、その間はほとんど飛ばずに落ち葉や草木の上にいる。産卵後の卵期は約 2 週間で、幼虫期は約 1 ヶ月とされ、6 月にはさなぎとなって、来年の春まで過ごす。産み付けられた卵が無事成虫になれる割合は、2～4%といわれている。

＜ギフチョウとヒメギフチョウ＞　ギフチョウとよく似た蝶にヒメギフチョウがいるが、日本固有種ではなく、アジア大陸にも分布しているものの、愛知県には生息していない。ギフチョウは日本固有種で、本州（秋田兼～山口県）に生息しているが、開発や植林、里山の荒廃で全国的に減少し、環境省の絶滅危惧Ⅱ類だ。この幼虫は基本的にカンアオイの仲間の草の葉を食草とし、ヒメギフチョウの幼虫はウスバサイシンを食草とする。それで、２種類の植物の分布と重なり合うように蝶の分布も本州中央部で東と西に分けられ、この分布境界線を「リュードルフィア線」と呼ぶ。

＜絶滅が危惧されるギフチョウ＞　本州の秋田県南部から山口県中部にいたる 26 都府県に分布していたが、全国的に減少し、環境省により、絶滅危惧 II 類（VU）の指定を受けている。東京都と和歌山県で絶滅、23 府県で絶滅が危惧されている。減少要因は、低山地の生息地がゴルフ場、宅地などへの開発に

より次々と消失したこと、及び二次林の管理が行き届かなくなり藪化したことによる幼虫の食草カンアオイ類の減少などによるとされる。以下の多数の自治体で天然記念物などの文化財に指定されている。

〇国指定天然記念物

「黒岩山」（長野県飯山市、ギフチョウとヒメギフチョウの混棲地として天然記念物（天然保護区域）に指定）

〇都道府県指定天然記念物

神奈川県（相模原市緑区藤野地区の「ギフチョウとその生息地」）、京都府（全域）、岡山県（真庭市の「ギフチョウ発生地」）

〇市町村指定天然記念物

大石田町、鮭川村、喜多方市、妙高市、小谷村、白馬村、飯田市、身延町、天竜市、浜松市、福井市、伊賀市、名張市、松江市、御所市、田布施町など

愛知県内でも、開発や植林、里山の荒廃によって減少し、「愛知県レッドリスト」では、2015 年（平成 27）より絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。しかし、減少傾向が続いていて、「2020 年愛知県レッドリスト」では、名古屋市内や豊橋市東部、蒲郡市北部からも絶滅した可能性が高いとされた。春日井市東部丘陵の落葉広葉樹林などで、幼虫の食餌植物であるヒメカンアオイ、スズカカンアオイが自生する周辺に生息し、成虫の蜜源としているカタクリ、スミレ類、ツツジ類などの花で観察することもできる。しかし、春日井市内でも減少傾向にある。

(4) 春日井市での蝶の保護活動

＜「春日井市自然環境の保全を推進する条例」の制定＞ 春日井市は、2004 年（平成 16）に「春日井市自然環境の保全を推進する条例」を制定、ギフチョウを指定希少野生動植物種に指定した。これにより、市域での生きている個体の捕獲、採取、殺傷、損傷を禁止、譲渡等も禁止し、保護をしている。また、外来種の放逐等も禁止された。

＜春日井市自然環境保全活動推進員の活動＞ 春日井市では、「春日井市自然環境の保全を推進する条例」に基づいて、自然環境保全活動推進員を置き、自然環境保全に関する普及啓発活動、自然環境調査等への強力、保全地区等での巡回活動を行ってきた。また、2021 年（令和 3）より春に東部丘陵でギフチョウの生息数調査を実施している。

＜市民団体の保護活動＞ 春日井市の市民団体「環境学習ネットワークグループ」では、カンアオイやギフチョウの調査等のギフチョウの保護活動を行っている。

＜市民団体による調査活動＞ 市民団体「かすがい東部丘陵自然観察会」では、自然保護協会のモ

ニタリング 1000 里地調査に参加し、蝶の調査も実施、東部丘陵の築水池周辺にコースを設定して、「トランセクト法」により、毎年 3 月～11 月に原則月 2 回の調査を実施し、蝶の種数と個体数をカウントし、全国での集計へデータを提供している。　　（記録・編集：河地　清）

OPINION　人間社会への警告！誰が自然環境を護るのか！

自然は、かつて人類共通の富であり、財産であったはずだ。全ての物質が商品化しそんなものまで金に換わるのかと言う時代になって久しい。開発という名目で自然は商品化し、金銭化され経済は発展した。その時は自然が破壊されているなどとは、多くの人は思ってもいなかった。あれから約半世紀地球規模で SDGs が叫ばれる時代が到来した。未来への希望が将来への持続可能な開発目標に行き方が変わってきた。蝶の減少、ホタルや淡水魚の絶滅は、今日の人間社会への警告だ。そしてやっと声高に環境問題が叫ばれる今日この頃だ。長年自然環境保全活動をされている研究者達は、自然破壊の原点を

「ふるさと春日井学研究フォーラム」

78種類のチョウ確認

市自然環境保全活動推進員 尾崎さんが講演

第88回ふるさと春日井学研究フォーラム（河地清会長）が5月20日にささえ愛センターで開かれ、尾崎尚志さんが「春日井市の蝶の変遷とギフチョウ」の講演を行いました。

尾崎さんは春日井市自然環境保全活動推進員で調査活動や自然観察会などの講師も務めます。講座ではチョウの分類や生息状況、ギフチョウの生態などを豊富な写真ともにわかりやすく説明。

春日井は多様な自然環境に恵まれ、現在78種類のチョウが見ることができます。一方、開発や外来種の侵入による減少も心配されており、日本固有種のギフチョウも絶滅危惧種で個体数が減っています。

現在深刻なのは、自然環境保護団体の高齢化。チョウの調査には飛んでいる姿を見て識別する知識が必要ですが、調査できる人が激減しています。自然観察会には多くの小学生が親子で参加してくれるものの中高生になると遠ざかってしまいます。「自然の調査活動や保護活動に参加する後継者を育てたいですね」と尾崎さん。来場者もチョウの話題で盛り上がりながら、市民活動の大切さに思いをはせていました。

チョウの説明をする尾崎さん

「春日井くらしのニュース」(2023. 6. 22)

「1960 年代半ば以降の高蔵寺ニュータウンの宅地造成と住宅建設、高度経済成長期以降の工業団地などによる開発が進み、ゴルフ場造成などもあって、自然環境が大きく変貌してきた。」と断定する。今までに、当会で 17 回（2014.7）蛍は自然のバロメーター–ビオトープでホタル養殖–　31 回（2015.9）蛍のロマン–ホタル養殖から放流活動–　73 回（2020.3）ふるさと春日井の自然－築水池の自然保護－の話を聞いてきた。自然のバロメーターである「蝶」「ホタル」「淡水魚」「稀少植物」の減少は、持続可能性を追求する人間社会への警告である。

<u>かけがえのない自然を誰が護るのか。行政か、企業か、市民か・・・・？</u>　（文責：河地　清）

かすがい市民活動情報ｻｲﾄ：http://kasugai.genki365.net/

ふるさと春日井学　検　索